

公益財団法人 海外子女教育振興財団
AG5 事務局 様

2020 年度 AG5 報告書

1. 報告者	
(1) 学校名	シンガポール日本人学校チャンギ校
(2) 氏名	中嶋 尊弘
2. 実施体制	
2019 年度 4名のプロジェクトメンバーで基礎研究 2020 年度 校内研究として全校実施	
3. テーマ	
主体的・対話的に学びを深め、自らの考えを進んで表現する児童の育成 ～PYP の視点を踏まえた探究型学習のカリキュラム構築と授業実践を通して～	
4. 目的と概要	
〈目的〉 ① IB(PYP)の理念を取り入れ、本校探究科基礎、生活科のカリキュラムの系統性の強化 ② IB(PYP)の探究手法から、教師は新しい教え方、児童は学び方を身につける。	
5. 今年度実施した取組み (※研究会や出張等は日程も含め記載してください)	
① 開智望小学校から講師を招き、全 7 回、研修会を実施した。 ② 実質、二学期からの開始だったので 2 年、4 年、6 年の3つの学年で研究授業を行った。 ③ 協議会は、オンライン形式で行い、毎回、講師講評を動画で視聴した。 ④ 研究授業該当学年以外も、一単元の実施を行い、指導案も作成した。	
6. 今年度の成果・効果 (※詳細に記載し、成果物があれば添付してください)	
① 中心概念 (centralidea、keyconcept など) を実践の中で活用することができたこと。 ② 実践後、中心概念があることで以下の効果を各教員が実感していること。 ・centralidea があることで、学びの拡散を防ぎ、高度な概念学習を可能にする ・keyconcept は、単なる調べ学習にとどまらせない効果がある。分析に質を自然に上げてくれる。 ③ 教師による研修で、短期間のうちに IBPYP に対する理解が深まった。 ④ ICT を活用した資料保管方法などを開発できている。	
7. まとめ	
① 中心概念を使った授業は、児童の思考力向上に貢献する。 ② 中心概念を使う授業づくりは、学ぶ目的やねらいをより明確にしていけないとできない。	
8. 次年度の計画	
① 各学期に、中心概念を使った探究科基礎および生活科の学習 1 単元を作る。 ② 引き続き、中心概念の効果的な学習方法を研究する。 ③ 客観的に助言をしてもらえる講師とともに研究する。	
9. 所感	

各教師、学年部の努力により、実践の中で「IB の学び方の力」を掴めることができ始めている。この実感に対する個別差はあるが、やはり体験、実践に勝る学びはないと感じる。また、centralidea など、高度な概念学習を作るうえで、教師自身が「概念学習の在り方」「抽象的に力」を身につける必要性があると感じている。やはり、具体的活動のみを扱っても高度な目的やねらいを達成することや、長いスパンで子供を育てる視点を持つことができない。日々の授業に追われている教師だからこそ、「具体」をいち早く明確にしたいという気持ちはよくわかるが、「学ぶ目的」「一つ一つの学習活動の意味」といった、一歩抽象的なことについて、一人一人の教員が言葉にできるようにしなければならない。

IB の授業を作る上で、教師自身が意味や目的を明確にしていく「抽象的な思考」を鍛えることは欠かせない。そして、具体的活動と抽象的な思考を往復しながら、高度な概念学習が完成されていくのであろうと感じる。非常に、やりがいがあり、教師自身の成長が問われる研究である。一方、将来的にこのような優れた研究が日本に広まるためには、教師の研究時間の確保という課題をクリアしなければ「持続可能な研究」にはならないと感じている。個人の skill を高めるモチベーションは当然個々人の教師により意識の差はあるが、システムとして教師が学ぶ体制をもう少し改善できないものかとのジレンマがある。その意味では、今年度のチャンギ小学校の先生方の研究姿勢は本当に素晴らしいものであったと感じている。正直、激務の中で研究に時間を割く「意識の高さ」をほとんどの教員が持ち合わせていた。そして、熱心に取り組んだ教師ほど、その効果を実感している。

※記入欄は適宜拡張してください。